



現代の学問は、おおまかに文系・理系で分けられている。数学が得意な人は理系、文学が得意な人は文系、そして、絵画・デザインなどの芸術分野は、一般的に文系として認識されている。しかし、「写真」はどうだろうか。

一口に写真と言っても、その場面に一番適したレンズの選び方や、感光材料などの専門知識が必要になる。一方で、色彩、モデルのポージングなどは芸術的素養が求められる。こうした理系的知識と文系的センスの融合が「写真」である。

本特集では、写真教育をルーツとする東京工芸大学と、その中野キャンパスにある写大ギャラリーを紹介しようと思う。

**潜入！
東京工芸大学芸術学部とは？**

日本における写真教育の発端は、東京高等工業学校（現・東京工業大学）の工業図案科に製版科が誕生したことから始まる。ここでは印刷技術のプロセスなどの技術的な知識の一部として写真を学ぶことができたが、撮影技術や作画などの芸術的な知識には不安があった。そこで今度は、文部省（現・文部科学省）の指示により、製版科は東京美術学校（現・東京芸術大学）へ移管され、後に写真科となり芸術分野に秀でた教育を行うことになった。1926（昭和元年）年、東京美術学校写真科は、東京高等工芸学校（現・千葉大学工学部）へ移管され、印

刷工芸科写真部となった。それ以前の1923（大正12）年、当時の小西本店（現・コニカミノルタ）の創業者が「国家の発展に貢献するために写真教育を専門に行う学校が必要である」と声を発し、東京美術学校からも教授を招き誕生したのが、小西写真専門学校（現・東京工芸大学）だ。

東京工芸大学は、他大学が絵画や彫刻などの伝統的なファインアートから始まるのに対し、写真という、技術×芸術をミックスした「メディア芸術」という土台からスタートしたことがもっとも特徴的と言える。ネットワークを通して全世界に作品を発信することを目的としたメディア芸術は、現代のクリエイティブ産業やコンテンツ業界に直結している分、就職率が高いのも強みだ。

芸術学部は、今まで厚木と中野で学年ごとに分かれていたが、2019年4月からは、厚木キャンパスに通っていた1〜2年生を新たに迎え、すべての芸術学部生を中野キャンパスで受け入れる新体制でのスタートが決定している。

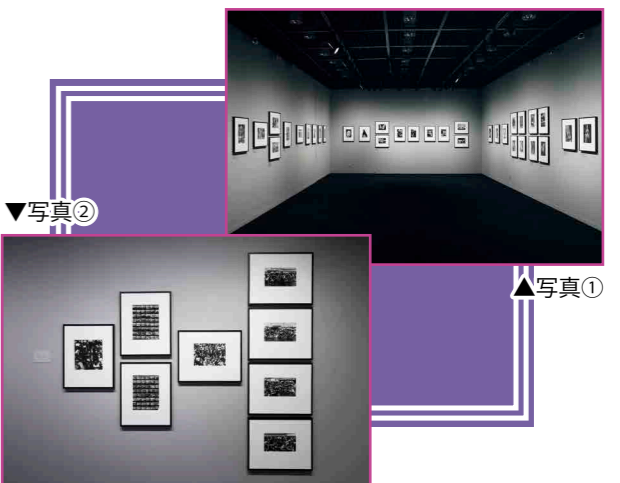
**写大ギャラリーと
オリジナル・プリント！**

1975（昭和50）年に設立された写大ギャラリーは、国内外の優れた写真作品の展示・収集・研究を目的とした施設だ。

特に森山大道氏のコレクションは海外の美術館などからの依頼を受け貸出することもあるそうだ。近年では、ニューヨーク・パリ・ウィーンなどで行われた展覧会にも貸出を行っている。

また、収蔵作品は年度ごとに新規収集されているので、既に写大ギャラリー作品を鑑賞している方でも楽しめるようになっている。

2017年度は、東京工芸大学名誉教授である細江英公氏が秋に「旭日重光章」を受賞したことを記念して、1970（昭和45）年代の代表作である「抱擁」6点が新たにコレクションに加えられた。



1970年〜1980年頃、日本では「写真を芸術作品として公的機関で収集・保存していこう」という動きがあり、1980年代半ば以降、写真を収集する美術館が相次いで設立された。しかし写大ギャラリーは、そのような美術館設立より前から収集活動を行っていたため、現在も国内で屈指のオリジナル・プリント（※）の所蔵数を誇っている。

※：『オリジナル・プリント』とは、写真家自身によって制作され、署名などが入れられたプリントのことを指す。

1975（昭和50）年、東京工芸大学の教授に就任した細江英公氏は、まず本物の写真を日常的に見ることができるとして写大ギャラリーを提案した。

その他にも、東京工芸大学では公開講座や卒業制作展など、一般参加OKの様々なイベントを季節ごとに開催している。

晩秋深まる今日この頃、瑞々しい芸術作品に触れ、理解を深めてみてはいかがだろうか。

- 参考WEBサイト
- ・東京工芸大学公式ホームページ
<https://www.t-kougei.ac.jp/index.html>
- ・東京工芸大学写大ギャラリー
公式ホームページ
<http://www.shadai.t-kougei.ac.jp>

★取材協力
東京工芸大学芸術学部長・教授
吉野 弘章氏（左写真）



しかし、約半数がプリントされた1979（昭和54）年、氏が脳出血のため倒れ、結局意識が戻らぬまま、1990（平成2）年9月15日、入院先で心不全のため亡くなった。

そのため、生前の土門氏が監修したオリジナル・プリントを収蔵しているのは写大ギャラリーのみとなった。

森山大道コレクション（写真②）

森山大道氏は、1960（昭和35）年後半からワールドワイドに活躍している。日本写真界のスターと言っても過言ではない存在だ。

大阪出身の森山氏は、1961（昭和36）年に上京した際、3年ほど細江英公氏の助手を務めていた。その縁もあり、1976（昭和51）年10月に細江氏の呼びかけに応じ、写大ギャラリーで写真展を開催することになった。その際運び込まれた、1960年〜1970年代における初期の代表作のプリントを、壁一面に張り出すという斬新な展示をして注目を浴びた。そして展示会終了後に、それら約1000点の写真を、一括して写大ギャラリーが買い上げることとなった。

これらの作品は、近年、国際的な価値をますます高めている森山氏の初期作品をほとんど網羅している。作家が初期に制作したプリントは『ウィンテージ・プリント』と呼ばれ、その時の作家の気持ちを焼き付けた作品として歴史的価値が認められている。

細江氏は、我が国の写真家では4人しかいない文化功労者に選出され、数々の名作を発表した世界的に著名な写真家だ。今も現役で写真活動に従事しており、東京工芸大学の名誉教授でもある。

写大ギャラリー設立当時、日本ではオリジナル・プリントを公的に展示・収集する機関はまだなく、この提案は日本初の試みとなった。

そして1975（昭和50）年5月20日に日本初の「ウィン・バロック展」開催をきっかけに、写大ギャラリーは国際的に注目され、国内でも大きな話題となった。以来、写大ギャラリーでは海外の著名な写真家の個展や歴史的意義を持つ国内作家の展示会など、数々のユニークな展覧会を企画し、会期中には作家本人による一般向けのトークショーなども実施している。

そんな写大ギャラリーが誇るべき作品の中に、土門拳氏と森山大道氏のオリジナル・プリントがある。

★土門拳コレクション（写真①）

土門拳氏は生前、主に写真集や雑誌などで作品を発表する写真家だった。当時から注目されていた作品を後世に残すため、オリジナル・プリントを購入させてほしいと大学側が嘆願した結果、1978（昭和53）年、約1200点の作品が収集されることとなった。こうして、それらを数年かけてプリントする一大プロジェクトが始動した。